

Daily Chronicle

連載 8268回

淡き日々

七十六年目の夏に ②



五木寛之

日分書くつもりだったのだが、読みかけた本が面白くて、ついに一枚もできぬまま盛岡だ。

最近の電車は速すぎる。せめて、四、五時間も走ってくれば仕事もほかどるのに、あつというまに目的地だ。

読みさしの新書が面白すぎたというのは、腹が立つような、得をしたような妙な気分である。

なにげなく書店で手にとった新書だが、あまりに端的というか、直截なタイトルに苦笑しながら求めた

(昨日のついき)
 今 日は盛岡へいく。東京駅のデパ地下で、一口いなるの弁当を買っていたら、あやうく電車に乗りおくれそうになつた。

午後三時五十六分発の、東北新幹線はやて25号は、雨のなかを大宮、仙台とひた走って、六時二十二分に盛岡へ着いた。

車中で新聞連載原稿を二

のが、じつは近来になく刺激的な一冊だったのである。

ときどきそういうことがあるから本屋の前は素通りできないのだ。

一見、トンデモ本のようにみえて、じつは深い本と

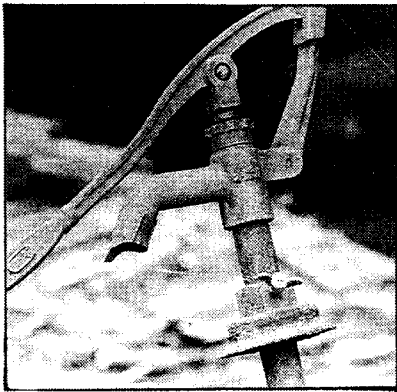


PHOTO 石山 貴美子

面白本だった、と勝手に感激しただけの話である。今年になって読んだ本、ベスト10のなかに入れることにした。

これは実用書であると同

時に、あたらしい思想をたつぷり含んだ哲学書でもあつた。最近読んだ新書のなかでは、『新しいヘーゲル』に続く当たりといつていい。

ずっと昔、多田富雄さんの『免疫の意味論』を読んだときと同じくらいにのめりこんで読んだ。

のなかで、古いパラダイムはどのようにして変わるか、という話のくだりについ笑ってしまった。人間は一つのパラダイムを奉じてしまうと、それを愛することは、と著者はいう。だから古いパラダイムが変革される可能性は、その連中が年をとって死んでしまった後のことである、という。その二ヒリズムが湿度の高い夏の日には、じつに爽かに感じられた。(この項つづく)

— 協力・文芸企画